司書が選ぶ100冊の絵本

〈福岡市総合図書館（本館・分館）〉

はじめに

福岡市では平成１７年（２００５年）３月に、最初の「福岡市子ども読書活動推進計画」が策定されました。それにあわせて、私たち福岡市総合図書館（本館・分館）で働く図書館司書で、おすすめの１００冊の絵本を紹介したリストを発行しました。

それから１５年以上このリストは、絵本と子どもたち、そして図書館司書を繋ぐ役割を果たしてくれました。しかし、その間にも、新しく子どもの心を惹きつける魅力がある絵本が多数出版されたり、残念ながら入手が難しくなってしまった絵本がでてきました。そこで今回、リストの内容をあらためて吟味し、名称を『司書が選ぶ１００冊の絵本』として、新たなリストを発行することにしました。

リストの編集作業を通して、これまで私たちがすすめてきた絵本が時を経てもなお、子どもたちにとって変わらずに価値があることを実感できたとともに、子どもたちを笑顔にしてくれる新しい絵本が数多く出版されていることを発見できました。

１５年前に私たちがリストに込めた思いを下記に再掲します。今もこの気持ちに変わりはありません。

新たなリストが、これまでと同様に、絵本と子どもたち、そして図書館司書を繋いでくれることを願っています。

図書館司書からのメッセージ

「子どもたちは何よりも人として大切にされなければならないし、子どもが成長するために私たち大人はその援助を惜しんではならない。心の栄養を十分に与えられた子どもは、魅力的な大人へと成長していき、社会は成熟した豊かなものとなっていく。」そんな当たり前のことが出来なくなってきているのが、現代社会ではないでしょうか？

私たち福岡市の図書館で働く図書館司書は子どもたちによい本をという想いを持ち、日々の仕事に励んできました。毎年数多く出版される子どもの本の中から、読み継がれていくと思われる本を選んだり、永く読み継がれてきた本を買い揃えたりして、子どもたちを待ち続けてきました。

子どもたちは本が好きです。よい本に出会ったときは最高の笑顔を見せてくれます。私たちはそんな笑顔を、おはなし会やブックトーク、図書館のカウンターで目にするたびに確信することができました。

このリストは子どもたちの幸せな未来を信じ、そして周囲の大人の方たちに、子どもたちと一緒に絵本を楽しんで欲しいと願い作ったものです。子どもたちとの楽しい読書の時間を味わってみて下さい。

凡　例

本書に収録された絵本は、書名の５０音順に配列しました。

１.図書についての書誌的な事項は、書名、著者名、画家名、訳者名、出版社名、出版年、ページ数、大きさ（タテ×ヨコｃｍ）の順に記載しました。

２.出版年は、単行本の初版年です。

３.ページ数は、奥付やページに表記がないものは１冊と表記しています。

４.作者名索引は、著者名、画家名を５０音順に並べました。外国人名については、姓・名の順に並べました。

あおくんときいろちゃん

レオ・レオーニ 作　藤田 圭雄 訳
至光社　1967年　1冊　21×21㎝

あおくんにはたくさんのおともだちがいます。なかでもいちばんのおともだちは、きいろちゃんです。
ある日、おうちで留守番していたあおくんはきいろちゃんと遊びたくなって、きいろちゃんのところに行きます。ところがきいろちゃんはいません。さがして歩くうちに、ばったりきいろちゃんにであい、うれしくなったふたりは混ざり合ってみどりになりました。しばらくふたりはみどりのままで遊んでいましたが･･･。
古典中の古典といわれるこの作品ですが、色の楽しさ、混ざり合いの不思議、物語の深さはいつまでも褪せることはありません。

あかいふうせん

イエラ・マリ　さく
ほるぷ出版　1976年
32ページ　22×22㎝

目にあざやかな赤いふうせん。ふうせんがりんごになり、りんごが蝶になり、蝶が花になり･･･。形が変わっていく楽しさ、モノクロの線画に浮かぶ赤。
小さな赤ちゃんでも興味を示す一冊です。言葉がないので、子どもとやりとりをしながら、自由に物語をつくるのも楽しいでしょう。

※文字のない絵本です。

あかずきんちゃん グリム童話

グリム【原作】ポール・ガルドン　さく
ゆあさ　ふみえ　やく
ほるぷ出版　1976年
32ページ　21×27㎝

おばあさんの家までおつかいをたのまれた、あかずきんちゃん。けれどもついつい道草をしてしまいました。その間にオオカミはおばあさんを食べてしまい、さらにあかずきんちゃんをねらっておばあさんに変装するのでしたという、誰もが知っているグリムのおはなしを、楽しくコミカルな絵と語りで表現しています。自然を愛する作者らしく何色もの色を細かく使って、ゆたかな自然の木や花を、生き生きと描いています。ページをめくるとあかずきんちゃんの丸いかわいい目や、色とりどりの野原の花たちに、引き込まれてしまいます。そしてオオカミの毛皮や木の色が、ただの一色ではないことに気づかせてくれます。

あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかま

イ　ヨンギョン　ぶん・え
かみや　にじ　やく
福音館書店　1999年
32ページ　24×32㎝

これは韓国の昔の物語をもとにした絵本です。「あかてぬぐいのおくさん」が昼寝している横で、おくさんの針しごとの７つ道具たちが、「わたしがいちばん」とそれぞれの重要さを言い立ててあらそいます。目をさましたおくさんは「いちばんえらいのはこのわたし」と７にんの仲間をしかりつけたのですが、みんながいなくなってしまった夢を見て、お針はみんながそろっていなくてはできない仕事、と気づきます。韓国の昔のくらしの様子もめずらしくて楽しく、ただ寝ているだけ、と見えるおくさんの表情が、ページごとに少しづつかわってゆく様子を楽しむこともできます。

雨、あめ

ピーター・スピアー　作
評論社　1984年
38ページ　27x26㎝

２人の子どもの雨の日の様子を、絵の力のみで展開し、物語っている絵本です。２人が広い庭で水遊びをしていると雨が降り始めました。でも２人はお母さんに大きな傘を用意してもらって散歩に出かけます。雨降りの庭には楽しい子どもの遊びがいっぱいです。２ページにわたる水たまりや土砂降りの雨と突風の描写は圧巻です。作者の観察眼と緻密な筆致によるこの絵本は、物質的にも精神的にも安定しているこの家庭の物語にぴったり合っていて、読み手の心も豊かにしてくれます。世界中の全ての子どもたちがこの絵本の主人公の２人のように、しあわせに育って欲しいと願わずにはいられません。

※文字のない絵本です。

ありこのおつかい

石井　桃子　さく　中川　宗弥　え
福音館書店　1968年
40ページ　28×22㎝

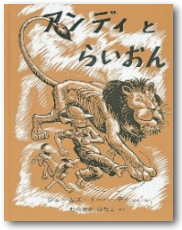
ある日ありのありこはお母さんからおつかいを頼まれます。途中してはいけないと言われた道草をしたありこは、かまきりと、かまきりはむくどりと、むくどりはやまねこと、やまねこはくまとつぎつぎに大喧嘩になりのみ込まれてしまいます。けれどもくまのお母さんのおかげで、みんなつぎつぎに口から飛び出て、ご馳走を分けてもらい仲直りします。心から謝ったありこは、くまのお母さんの頭にのせてもらい無事におつかいを終えます。子どもは、小さくて好奇心が強いので時に失敗もしますが、それをきちんと受け止めてくれる大人がいてこそ成長できるという考えが、余白の白地に淡い配色の優しく親しみのある絵にこめられています。

アンガスとあひる

マージョリー・フラック　さく・え
瀬田　貞二　やく
福音館書店　1974年
32ページ　17×25㎝

アンガスはいろんなことを知りたいスコッチテリアの子犬。聞こえてくるあの音はなーに？アンガスはあひると出くわし、追いかけたり、追いかけられたり、逃げ帰ったりします。擬人化されていない動物そのままの行動がアメリカ郊外の暮らしの中で描写されていますが、一方でアンガスの好奇心いっぱいの行動や愛らしい姿・表情は、小さい子どもに通じるものがあります。絵は低い視点からのシンプルな構図で、写実的で明るい色調、輪郭線などでわかりやすくなっています。この作品は成長していくアンガスの連作の第１作目であり、シリーズが５作あります。

アンディとらいおん



ジェームズ・ドーハーティ　ぶん・え
むらおか　はなこ　やく
福音館書店　1961年
80ページ　27×20㎝

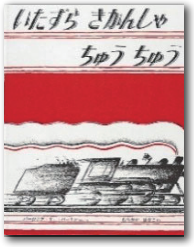
アンディ少年は図書館で借りたライオンの本に夢中です。そんな朝、なんとアンディは本物のライオンと遭遇するのです。こわかったけど、トゲを抜いてやると顔をペロペロなめられました。まもなく、そのライオンとサーカスで再会します。大暴れしていたそのライオンはアンディを思い出し、喜んでおとなしくなりました。アンディは勇敢さを表彰されてライオンとも友達になりました。怖いものにも恐れずに困っているものには親切に出来る事、そして親切にしてもらった事を忘れずに感謝する事を、躍動感あふれる文と絵で生き生きと、時にユーモラスに描いています。

イソップ12の物語

イソップ　原作
リスベート・ツヴェルガー　絵
吉田　新一　訳　太平社　1990年
1冊　26×28㎝

ツヴェルガーの描く絵本の主人公はどこかおしゃれで、大人びた雰囲気を持っています。このイソップ物語の登場人物、動物たちにもその魅力が余すところなく描かれ、洗練されたツヴェルガーの世界を楽しむにはもってこいの作品です。まるで薄桃色の額縁の中に描かれた１枚の絵を見るように構成されたそれぞれのお話は、子どもたちの絵本の世界を広げてくれるに違いありません。「ウサギとカメ」を見てください。ゼッケンを付けたウサギが道端で寝ています。遥か後方をカメが懸命に歩いてきています。ウサギはウサギらしくカメはカメらしく、けっして子どもに媚びることなく描く、それがツヴェルガーの絵本です。

いたずらきかんしゃちゅうちゅう



バージニア・リー・バートン　ぶん・え
むらおか　はなこ　やく
福音館書店　1961年
45ページ　31×23㎝

小さな町の小さな駅から、大きな町の大きな駅まで、毎日走っているちいさな機関車ちゅうちゅう。ある日ちゅうちゅうは考えました。「わたしひとりなら、もっともっと速く走れるんだ。そうしたら･･･『なんてきれいなすてきな機関車だ！あれ　ごらん。ひとつだけで走っているよ』ってみんながいうでしょう」ちゅうちゅうはスピードを出して走ります。驚く人々をながめながら、ちゅうちゅうは踏切を通り抜け、跳ね橋を飛び上がって、駅の操車場に飛び込み、とうとう古い古い線路に入り込んで止まってしまいます。

わくわくと不安でいっぱいの冒険が黒コンテの線画でダイナミックに描かれ、絵にあわせたリズミカルな文章と動きのある文字は乗りもの絵本の傑作といえます。

いつかはきっと･･･

シャーロット・ゾロトフ　ぶん
アーノルド・ローベル　え
やがわ　すみこ　やく　ほるぷ出版
1975年　32ページ　16×22cm

「いつかは　ね　いつかは　きっと　そうなるんだわ･･･」。ちいさな女の子が、自分の夢を幸せそうに語ります。それは、「お兄ちゃんが、お友達に紹介してくれるの。『うちのちびさ』なんて言わずに『ぼくの妹です』って。」、「家の中を歩きまわっていると、見たこともない部屋が見つかる！」というように、大人からすれば、たわいなかったり、突拍子もないものばかりです。でも、自分の子ども時代を思い出してみてください。この女の子のような望みや憧れを、誰もが持っていたはずです。この絵本では、そんな夢の数々を、子どもの目線と大人のあたたかなまなざしで、見事に描いています。最後の女の子の台詞も、ユーモアが効いていて思わずほほえんでしまいます。

ウルスリのすず

ゼリーナ・ヘンツ　文
アロイス・カリジェ　絵　大塚　勇三　訳
岩波書店　1973年　1冊　25×32cm

ずっと遠くの高い山やまのその奥の、小さな村にウルスリは住んでいます。いよいよ明日は鈴行列のおまつりです。大きな鈴を借りて一番先頭を歩きたいと思っていたのに、ウルスリは小さな鈴しか借りることが出来ませんでした。ウルスリは、山の夏小屋においてある大きな鈴のことを思いつき、一人でそれをとりに出かけました。ようやく小屋にたどり着きましたが、疲れて眠り込んでしまいました。両親や村の人たちが心配してウルスリを探しまわりますが･･･。スイスの絵本作家カリジェは、山の自然の美しさ、厳しさ、山の子どもの暮らし、喜び、悲しみをいきいきと描き出しています。この『ウルスリのすず』もアルプスの山の生活と空気が、読む人に伝わってくる見事な作品です。２０１８年に改版が出版されています。

おおかみと七ひきのこやぎ　グリム童話

グリム【原作】
フェリクス・ホフマン　え
せた　ていじ　やく　福音館書店
1967年　32ページ　22×30㎝

森へでかけることにしたおかあさんやぎは、こやぎたちに、留守の間、おおかみには十分気をつけるように言いました。ところがずるがしこいおおかみは、用心深いこやぎたちをだまして、まんまと家の中に入り込み、こやぎたちを食べてしまいました。時計の箱に隠れていた末のこやぎだけが助かり、おかあさんやぎと一緒に、寝ているおおかみのお腹を切り裂き、こやぎたちを助け出して、かわりにお腹に石をつめておおかみをやっつけました。

ホフマンの落ち着いた色合いのリアリティあふれる絵が、よく知られたこのグリム童話のストーリーを丁寧に描き出します。子どもたちはこの絵とともに、知恵くらべと逆転劇の物語を何度でも楽しむことでしょう。

おおきなかぶ　ロシア民話

A・トルストイ　再話　佐藤　忠良　絵
内田　莉莎子　訳
福音館書店　1962年
28ページ　20×27㎝

おじいさんの植えたかぶは、願いどおり、あまい大きなかぶになりました。ところが、あんまり大きくなりすぎて、おじいさんが抜こうとしてもかぶは抜けません。おじいさんはおばあさんをよんできて、うんとこしょ、どっこいしょ。それでもかぶは抜けません。おばあさんは孫をよんできて、孫は犬をよんできて、犬はねこをよんできて、ねこはねずみをよんできて、みんなで、うんとこしょ、どっこいしょ。やっとかぶは抜けました。

「うんとこしょ、どっこいしょ」のリズムにのせて繰り返される場面の面白さと、角度を変えてかぶが描かれることで、臨場感が伝わってきます。ついつい子どもたちも真似をしてしまうようです。一緒に楽しんでください。

おおきなもののすきなおうさま

安野　光雅　作・絵
講談社　1976年
28ページ　29×22cm

おおきなもののすきなおうさまは何でもおおきくないとお気に召しません。屋根よりもおおきなベッド、のこぎりよりもおおきなナイフとフォーク、むし歯をぬくためのおおきなくぎぬき…おおきなものを作るのに家来たちは毎日大忙しです。ある日、おうさまはおおきなうえきばちにチューリップの球根をうえました。「おおきなうえきばちにはおおきな花がさくに違いない」と心待ちにしていたおうさまですが、うえきばちにさいたのは小さなかわいいチューリップでした。

おうさまにふりまわされる家来たちが大変そうとは思いながらも、その様子が楽しくてついつい笑ってしまいます。おうさまのわがままには困ったものですが、最後にはとても大切なことに気づかせてくれます。

おかあさんだいすき

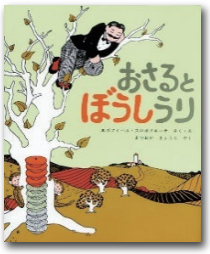
マージョリー・フラック　文・絵
光吉　夏弥　訳・編　岩波書店
1954年　1冊　21×17㎝

今日はお母さんの誕生日。ダニーはお母さんにあげるものを探しにでかけます。道々出会う動物たち、めんどり、がちょう、やぎ･･･みんなに聞いても、なかなかよいものはみつかりません。最後に訪ねていったくまが、ダニーをだきしめて、そっとないしょで教えてくれたものが一番いいおくりものでした。

色づかいの明るさと繊細な描線のやさしさ、繰り返しと駆けていくときの音（とっとこ、ぴょんぴょこなど）の楽しさや、くまの登場で変わる展開のおもしろさを、小さな子どもも喜びます。

贈り物とは「物」ではなく「愛」だと感じられる絵本です。

おさるとぼうしうり



エズフィール・スロボドキーナ　さく・え
まつおか　きょうこ　やく
福音館書店　1970年
44ページ　21×17㎝

売り物のぼうしを頭の上にのせて、それを売って歩くぼうしうり。ある日、ぼうしうりがひと休みしていると、さるたちにぼうしを取られてしまいました。ぼうしうりはぼうしを取り返そうと、指をつきつけたり、両手を振り上げたりしますが、さるは木の上でぼうしうりの真似をして「ツー、ツー」いうばかり。怒ったぼうしうりが、とうとう自分のぼうしを地面に投げつけると、さるたちも真似をしてぼうしを地面に投げつけました。ぼうしは地面におち、ぼうしうりはやっとぼうしを取り返すことができました。

カラフルで素朴な絵は、ぼうしうりとさるのキャラクターを魅力的に描き、お話の面白さを引き立てています。ぼうしを取ったさるたちの憎めない可愛らしさは子どもの可愛らしさに通じるものがあります。

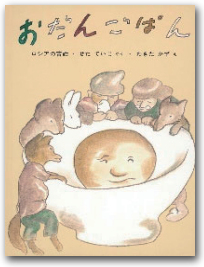
おじさんのかさ

佐野　洋子　作・絵
講談社　1992年
32ページ　31×22㎝

お気に入りの立派なかさを使うなんてとんでもない！ただ大事に持ち歩くのがおじさんのスタイルです。雨が降ったらかさが濡れないように走りますし、かさがなくて困っている子にもしらんぷり。でもある日、子どもたちが「あめがふったらポンポロロン　あめがふったらピッチャンチャン」と歌うのを聞いて、本当かどうか知りたくなってしまいます。

声に出して読むとよりいっそう楽しい気持ちになり、雨の日が待ち遠しくなります。また、雨ににじんだような青い色調の絵を眺めているだけでも心がしっとりしてくるようなすてきな絵本です。

おだんごぱん　ロシア民話



わきた　かず　絵　せた　ていじ　訳
福音館書店　1966年
24ページ　31×22㎝

おじいさんの頼みでおばあさんがこしらえた“おだんごぱん”は、窓のところでひやされている隙に、家の外へころころと逃げていきます。おだんごぱんは自分を食べようとする、うさぎ、おおかみ、くまたちから、歌うことで油断させて上手く逃げつづけますが…。

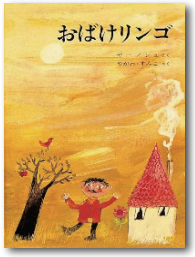
素朴なキャラクターたちが、その場面にぴったりの表情で描かれていて、おだんごぱんに逃げられ、食べることができずとても残念そうなおじいさんの表情、逃げ出せて得意そうにほほえむおだんごぱんの表情に、思わず笑ってしまいます。

おちゃのじかんにきたとら

ジュディス・カー　作　晴海　耕平　訳
童話館　1993年
32ページ　26×19㎝

ソフィーとお母さんが、お茶の時間にしようとしていると、トラがやってきました。とても礼儀正しい挨拶をするトラでしたので、二人は快く迎え入れました。トラはみるみるうちに、家中のありとあらゆる食べものを平らげ、水道の水まで全部飲み干して帰っていきました。「すてきなおちゃのじかんをありがとう。ぼくは、そろそろおいとまします。」最後の挨拶もそれは立派なものでした。でも大変です。トラが全部食べてしまったのでお父さんの晩ご飯がありません。水もないのでお風呂にも入れません。帰ってきたお父さんに事情を話したところ…。このあとのお父さんの行動はとても素敵です。おおらかな家族の姿に心なごむ一冊です。

おばけリンゴ

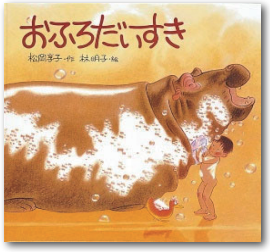


ヤーノシュ　さく
やがわ　すみこ　やく
福音館書店　1969年
32ページ　29×21㎝

今まで一度も実がなったことがなかったワルターのリンゴの木に初めて１つ実がなりました。ワルターが大事に育てたそのリンゴは大きくなりすぎて市場でも売ることができません。ワルターは困ってしまいましたが、そのころ国をおびやかしていたリュウ退治にワルターのリンゴが役に立つことになるのです。

予想のできない展開で物語が進み、どんどん引き込まれていく絵本です。漫画風に描かれた顔の表情と文字の大小で、読んでいる子どもたちもワルターの喜びや悲しみを一緒に感じて楽しむことができるでしょう。

おふろだいすき

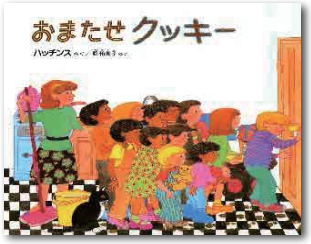


松岡　享子　作　林　明子　絵
福音館書店　1982年
40ページ　26×27

まこちゃんが、あひるのおもちゃのプッカを連れてお風呂に入っていると、お湯の中から、かめ、ペンギン、オットセイ、かば、くじらが次々に出てきました。競争したり、シャボン玉を作ったり、体を洗ったり、にぎやかです。くじらのシャワーで泡を流して、みんなお湯に入って数を数えました。でも、お母さんが来ると、動物たちはお湯に隠れたきり、出てきませんでした。湯上がりタオルにくるまると、いいにおい、いい気持ち。

暖かみのある黄色をバックに、まこちゃんや動物たちの表情がいきいきと描かれています。一人でお風呂に入れるようになった小さな男の子がめぐらせる空想の世界を、一緒に楽しんでください。

おまたせクッキー

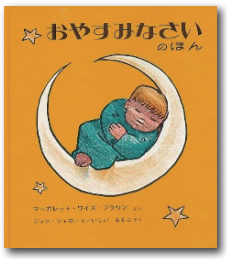


パット・ハッチンス　さく
乾　侑美子　やく
偕成社　1987年
24ページ　21×26㎝

お母さんがクッキーを焼きました。おばあちゃんが焼いたクッキーみたいにおいしそうです。ビクトリアとサムが６つずつ数えて分けたその時、玄関のベルが鳴り、お隣のトムとハナがやってきました。その後も、クッキーを食べようとするたびに玄関のベルが鳴り、クッキーを分ける人数がふえていきます。とうとう、クッキーがひとり１つずつになってしまったところで、また、ピンポーン！

リズミカルな繰り返しと子どもたちの表情が楽しい絵本です。減っていく戸棚のお皿や、増えていく床の足跡などの細かい描写も効果的で、私たちもドキドキしながらドアを見つめてしまいます。

おやすみなさいのほん



マーガレット・ワイズ・ブラウン　ぶん
ジャン・シャロー　え
いしい　ももこ　やく　福音館書店
1962年　32ページ　25×21㎝

太陽が沈み、夜になります。どこの家にも明かりがつきます。

何もかもが、それぞれ遊んだり働いたりすることをやめて、眠りにつきます。動物も、乗り物も、花も、みんな。

そして、子どもたちは、ほかの動物たちの幸せと無事も神様にお祈りして、ふとんに入るのです。

やさしい絵と、「ねむたい　ことりたち」、「ねむたい　さかなたち」、「ねむたい　ひつじたち」という繰り返しに、ページを追う私たちも、ゆったりとした気持ちで包まれます。

読み終えたら、静かな気持ちで、おやすみなさい。

かあさんのいす

ベラ・B・ウィリアムズ　作・絵
佐野　洋子　訳
あかね書房　1984年
32ページ　21×26㎝

「わたし」は、大きなびんにお金をためます。かあさんが働く食堂で仕事を手伝ってもらったお金、かあさんが仕事から帰ってきて渡してくれるお金、おばあちゃんが安売りで得したときにくれるお金。びんがいっぱいになったら、世界中でいちばん素敵ないすを買うのです。去年の火事で、ほかのものと焼けてしまったから、今はいすもないのです。

いよいよびんはいっぱいになり、夢にまで見たいすを買うことができました。いすを買う前と、最後のページで、いすに座っているかあさんの表情を比べてみてください。温かさだけでなく、火事というショッキングな出来事を乗り越えた一家の力強さも、ひしひしと伝わってきます。

かいじゅうたちのいるところ

モーリス・センダック　さく
じんぐう　てるお　やく
冨山房　1975年
40ページ　24×26cm

ある晩、マックスはオオカミのぬいぐるみを着て大あばれ。とうとう怒ったお母さんから､夕ごはんぬきで寝室に放りこまれます。すると、寝室が森になり、波がうちよせ、船を運んできました。船に乗ったマックスが着いたところは“かいじゅうたちのいるところ”。かいじゅうの王さまになって、またまた大あばれするマックスですが、やがてお母さんが恋しくなり、船で寝室へ帰ってきます。そこには、ちゃんと温かい夕ごはんがおいてありました。

見開きいっぱいに３場面連続で、マックスとかいじゅうたちが“かいじゅうおどり”をするシーンが大迫力。マックスのような“小さないたずらかいじゅう”たちは、きっとこの絵本の世界にひきつけられることでしょう。

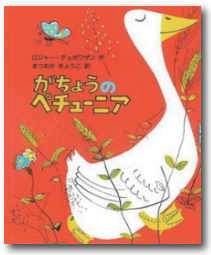
かしこいビル

ウィリアム・ニコルソン　さく
まつおか　きょうこ　やく
よしだ　しんいち　やく　ペンギン社
1982年　28ページ　19×25cm

ある日メリーは、汽車に乗っておばさんの家へ遊びに行くことになりました。ところが、あやまってお気に入りの人形ビルを、旅行トランクに入れ忘れたまま出発してしまいます。おいてきぼりにされたビルは、すぐに悲しみから立ち直り、全速力で走って汽車を追いかけ、無事メリーと駅で再会します。なんてかしこいビル！

作者ニコルソンが、娘メリーのために作った愛情あふれる絵本。テンポの速い展開ですが、物語の細部を絵がとてもよく伝えており、絵だけでも楽しめる作品です。

がちょうのペチューニア

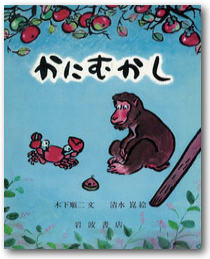


ロジャー・デュボワザン　作
まつおか　きょうこ　訳　冨山房
1999年　32ページ　26×21cm

がちょうのペチューニアは、散歩の途中で１冊の本を拾いました。本を持っているだけで賢くなれると勘違いしたペチューニアは、かたときも本を離しません。すっかり自分は賢くなったと思いこんだペチューニアに、いろんな動物たちが相談をもちかけますが、そのたびにみんな散々な目にあいます。何度かの失敗の後、ようやくペチューニアは、本は持っているだけではだめで、中身を読んで頭や心に入れてこそ役立つことに気がつくのでした。

ペチューニアをはじめとする動物たちのコミカルな表情とやりとりが楽しい絵本です。

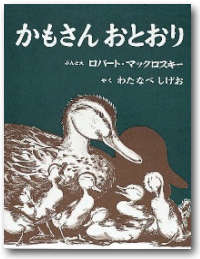
かにむかし



木下 順二 文 清水 崑 絵
岩波書店 1976年
1冊 33×26cm

「むかしむかし、かにが　しおくみを　しようと　おもうて、はまべへ出たところが、すなの　うえに、どこから　どうして　きたもんだか、ひとつぶの　かきのたねが　おちておった･･･」
おなじみの昔話「さるかに合戦」の絵本です。方言をまじえた独特の語り口と、味のあるユーモラスなさし絵が、昔話の雰囲気をよく伝えています。声に出して読んでみると、よりいっそうこの絵本の世界が楽しめるでしょう。

かもさんおとおり



ロバート・マックロスキー ぶん・え
わたなべ しげお やく
福音館書店 1965年
64ページ 31×23cm

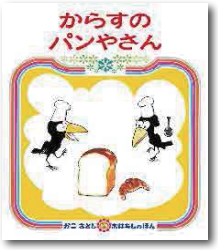
かものマラードさん夫婦が子育ての場所に選んだのは、大都会ボストンの街なかにある公園。公園から少し離れた川辺で卵を産んだマラードおくさんは、やがて８羽のひなを連れて、マラードさんの待つ公園へ引越しをすることに。車の行き交うボストンの大通りを堂々と行進するかもの親子に、通りは大混乱です。でも、親切なおまわりさんが交通整理にきてくれて、無事にかもさん一家を公園まで通してくれました。
セピア色の絵で、ほほえましいかもの一家の姿や、彼らを見守るあたたかな街の情景を描いた絵本です。鳥の目線から見たボストンの風景を楽しんでください。

かようびのよる

デヴィッド・ウィーズナー 作・絵
当麻 ゆか 訳
徳間書店 2000年
32ページ 23×27cm

火曜日の夜、空を飛んでいるのは、なんとカエル！信じられない出来事に、人も動物も驚いて目をぱちくり。その中をカエル達はゆうゆうと飛んでいきます。家の中に入っていたずらをしたり、干してある洗濯物にからまったり、犬と追いかけっこをしたりしながら。そして次の火曜日の夜、またまた信じられない事が起こって！？
これははたして、自然界の異変？超常現象？それともファンタジー？不思議な世界に引き込まれます。ほとんど文字のないこの絵本、まるで映画を観ているような印象を受けます。青い色で描いた夜の闇が印象的です。

からすのパンやさん



かこ さとし 作・絵
偕成社 1973年
32ページ 26×21cm

いずみがもりという森の中に、からすのパンやさんのお店がありました。パンやさんの子どもたちのおやつは、半焼きのパンや焦げたパン。うまく焼けなかったおやつパンですが、めずらしい、香ばしくておいしいと、まわりの子どもたちの間で評判になっていきます。もっと食べたい、いろんなかたちがあるといいなという声を受け、パンやさん一家はせっせせっせとパン作り。パンの焼けるこうばしいにおいが森いっぱいに広がると、あちらこちらからお客さんが飛んでくるのでした。
すいかパン・ぼうしパン・きょうりゅうパン…めずらしいパンがたくさん並んだページは大変魅力的。楽しくて、あたたかな気持ちになれる絵本です。

ガンピーさんのふなあそび

ジョン・バーニンガム　さく
みつよし　なつや　やく
ほるぷ出版　1976年
32ページ　26×26cm

ある日、ガンピーさんは船で出かけました。すると、子ども達や動物達が「乗せて」と言ってつぎつぎに乗ってきました。こんなに乗っても大丈夫？とちょっと心配になるくらいです。はじめはみんな楽しく乗っていたのですが、しばらくすると大変な騒ぎになり、とうとう船がひっくり返ってしまいます。でも、岸まで泳いで、服をかわかしたあとは、おきまりのお茶の時間です。

イギリス在住だったバーニンガムらしいのどかな生活が、ペン画に淡い水彩で描かれています。お日さまの下でたっぷり遊ぶ子ども達と動物達が、のびのびとしていて、みんなどこかとぼけた感じの表情が楽しい絵本です。他に『ガンピーさんのドライブ』もあります。2000年に新版が出版されています。

木はいいなあ

ジャニス・メイ・ユードリイ　さく
マーク・シーモント　え
さいおんじ　さちこ　やく　偕成社
1976年　32ページ　29×17cm

木は森を作ってくれます。木陰も作ってくれます。おいしい果実も実らせてくれます。災害からも守ってくれます。子どもの遊び場にもなってくれます。木はいいなあ。

そんな木の素晴らしさを子どもに楽しく語りかけ、最後は木を植えようというメッセージで締めくくられています。見開きいっぱいに、緑の葉や紅葉した葉が、鮮やかな美しい色彩で描かれています。

今の子どもはどれほど木に親しんでいるのでしょうか。昔に比べて木が少なくなっている今だからこそ、読んで欲しい絵本です。

きょうはみんなでクマがりだ

マイケル・ローゼン　再話
ヘレン・オクセンバリー　絵
山口　文生　訳　評論社
1991年　32ページ　26×29㎝

カラーと白黒の画面の繰り返しと言葉の繰り返しの面白さが一体となったこの絵本は、読み手も読んでもらう側も大満足という秀作です。

若い父親と母親と３人のこどもたちが、勇ましくくまがりにでかけます。草はらを、川を、ぬかるみを、森を、ふぶきをこの家族と一緒に通り抜け、ほら穴に到着です。でもやっぱりくまは怖い！さあ、一緒に逃げ出そう！

バタバタ、ドタドタ、ジャブジャブ、家まで一目散に逃げ出して、一緒にベッドに飛び込んで「ぼくらはもうくまがりなんかにでかけない」と叫んでみるのも楽しいでしょうね。

とにかくテンポを大事に読んでみてください。２０２０年に新版が出版されています。

くまのコールテンくん

ドン・フリーマン　さく
まつおか　きょうこ　やく
偕成社　1975年
30ページ　23×25cm

コールテンくんは、デパートのおもちゃ売り場で、自分を家に連れて行ってくれる人が来るのを待っていました。ある日、一人の女の子（リサ）がコールテンくんを見つけます。「あたし、ずっとまえからこんなくまがほしかったの」。けれどもお母さんは、ズボンのボタンが取れているから、とコールテンくんを買ってくれませんでした。そこでコールテンくんはボタンを探しに、夜のデパートを調べ始めます。

初めて見るエスカレーターや大きなベッドに驚くコールテンくんの無邪気な様子や、ボタンがないままの彼を迎えに来るリサの愛情が、こまやかな絵柄で描かれています。

ぐりとぐら

なかがわ りえこ【さく】
おおむら ゆりこ【え】福音館書店
1963年 28ページ 20×27cm

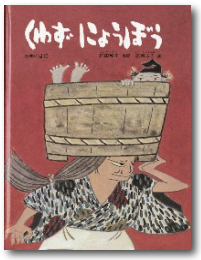
料理が大好きなぐりとぐらが、森の中で大きな卵を見つけます。２匹は大きな大きなカステラを作って、森中の動物たちと一緒に食べました。

リュックサックに荷物をつめたり、泡だて器でボールの中をかき混ぜたり。ぐりとぐらの楽しい作業の様子を、シンプルな絵柄で優しく描いてあります。出来上がったカステラの美味しそうなこと！

「ぼくらの　なまえは　ぐりと　ぐら　このよで　いちばん　すきなのは　おりょうりすること　たべること　ぐり　ぐら　ぐり　ぐら」

文章もリズム感がよく、ぜひ声に出して読んでほしい絵本です。

くわずにょうぼう



稲田和子 再話 赤羽 末吉 画
福音館書店 1980年
32ページ 27×20㎝

ある日欲張りな男の前に美しい娘が現れ、男の女房になりました。女房はめしも食わずによく働くので、男は大喜び。しかし、男は蔵の中の米俵が減っているのに気づきます。おかしいと思った男は、山へでかけるふりをして天井から家の中をのぞくことにします。すると女房の頭のてっぺんから大きな口がでてきて…。

独特な語り口と迫力ある絵が話の展開により一層スリルを与えています。

くわずにょうぼうの弱点が菖蒲とヨモギだったことから端午の節句の由来にもなっている昔話です。

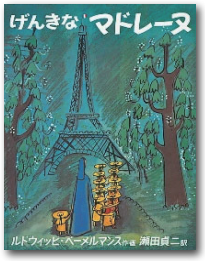
くんちゃんのはじめてのがっこう

ドロシー・マリノ さく
まさき るりこ やく
ペンギン社 1982年
36ページ 26×19㎝

今日はくんちゃんが初めて学校へ行く日です。みつばちやビーバーに話しかけながらくんちゃんはとても楽しそうです。でも学校へ着いた途端、くんちゃんは心配になりました。くんちゃんは字が読めません。計算ができません。くんちゃんはそーっと教室を出て行きました。でも大丈夫。先生はそんなくんちゃんを怒らないで、学校の楽しさを教えてくれました。

くんちゃんは森の中でおとうさんとおかあさんと一緒に暮らしています。くんちゃんの生活は、忙しすぎる大人たちや現代社会が忘れかけている“こども時代の静かな生活”の大切さを教えてくれます。

げんきなマドレーヌ

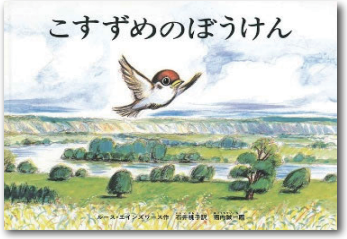


ルドウィッヒ・ベーメルマンス 作・画
瀬田 貞二 訳 福音館書店
1972年 48ページ 31×23cm

古いお屋敷に、１２人の女の子が住んでいました。一番のおちびさんはマドレーヌ。とっても元気な女の子です。ところがある夜、マドレーヌは盲腸で病院へ入院することになりました。お見舞いに行ったみんなは、マドレーヌのお腹の傷を見て、驚くやらうらやましいやら。自分たちも盲腸を切ってほしい、とマドレーヌの真似をして、大きな声で泣きはじめるのでした。

寄宿舎での女の子たちの生活が、独特の絵柄で生き生きと描かれています。背景に、パリ・オペラ座やノートルダム寺院など、パリの有名な建物や場所が多数描かれているのも見所のひとつです。

こすずめのぼうけん

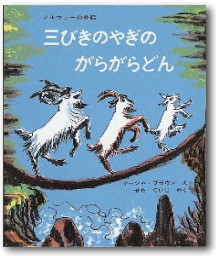


ルース・エインズワース 作
堀内 誠一 画　石井 桃子 訳
福音館書店　1977年
32ページ　20×27cm

こすずめは安心できる巣ですくすくと育ちました。巣立ちを前にお母さんすずめが飛び方を教え始めます。言われた通りさっと前に飛び立つと、ちゃんと空中に浮かんでいます。「ぼくひとりで、せかいじゅうをみてこられる」こすずめは自信と希望を胸に、元気よく外の世界へ飛び立ちました。しかし少しずつ、羽が痛くなり、頭も痛くなってきます。色々な鳥の巣を見つけては休ませて欲しいと頼みますが…。

自立への小さな一歩は冒険そのものです。段々と弱気になるこすずめの姿に、子どもは次こそは仲間でありますようにと願い、はやる気持ちでページをめくるでしょう。

三びきのやぎのがらがらどん　北欧民話



マーシャ・ブラウン　え
せた　ていじ　やく
福音館書店　1965年
32ページ　26×21cm

昔、三びきのやぎがいて、大きさは違うけれど名前はみんな、がらがらどんといいました。ある日三びきは山の草場へ登っていきました。でも途中の谷川には橋があって、大きな恐ろしいトロルが住んでいるのです。トロルを倒さなければ草場へ行くことはできません。小さいやぎから順に橋を渡っていくのですが…。

橋を渡る音に、やぎの重量感を感じさせ、繰り返しの面白さと、画面いっぱいに描かれた絵の迫力、トロルと対決する大きいやぎのがらがらどんの強くて迫力満点の戦いぶりは、子どもたちを惹きつけてやみません。

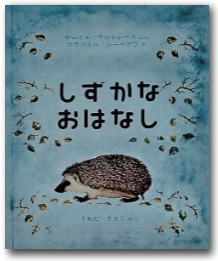
じごくのそうべえ

田島　征彦　作
童心社　1978年
40ページ　25×26㎝

軽わざ師のそうべえは、綱渡りの最中に落ちて死んでしまいました。地獄へ行く途中、そうべえは歯ぬき師、医者、山伏と道連れになりました。地獄では４人もろとも鬼に丸のみされるやら、えんま大王に湯のにえたぎった釜へたたき込まれるやら、針の山に放り込まれるやら。それでも４人はそれぞれの得意技で切り抜け、まるでこたえません。えんま大王はさじを投げて、４人を地獄から追い出してしまいました。

力強い絵とユーモラスな関西弁の語り口が愉快。『そうべえごくらくへゆく』、『そうべえまっくろけのけ』、『どろんこそうべえ』、『そうべえふしぎなりゅうぐうじょう』、『そうべえときじむなー』もあります。

しずかなおはなし



サムイル・マルシャーク　ぶん
ウラジミル・レーベデフ　え
うちだ　りさこ　やく　福音館書店
1963年　12ページ　28×23㎝

はいいろはりねずみの家族のしずかなしずかなおはなし。真夜中、森にさんぽに出かけたはりねずみの家族は、オオカミたちに見つかってしまいます。あわててまるくなって針を出すはりねずみの親子でしたが、オオカミたちはあきらめません。ところがそのとき、森に鉄砲の音が響きわたって、オオカミたちは逃げだしました。

青を基調にした味わいのある絵と、児童詩人であるマルシャークの言葉が静かな雰囲気を作り出しています。

しずくのぼうけん

マリア・テルリコフスカ　さく
ボフダン・ブテンコ　え
うちだ　りさこ　やく　福音館書店
1969年　24ページ　20×23㎝

水のしずくが生まれて、蒸発して、また水になって、氷になって、また水になる･･･というひとしずくの水の一生を描いた絵本です。

自然界のしくみを描いていますが、イラストのかわいらしさと、リズミカルな文章、そして、手書きによる文字（日本語版は堀内誠一による）のあたたかみで、読み聞かせをしても楽しめる絵本です。

まだ、科学的なことまで思い至らない小さい子どもでも、絵とおはなしで十分楽しめます。

11ぴきのねこ

馬場　のぼる　著
こぐま社　1967年
1冊　27×19㎝

おなかをすかせた１１ぴきのねこが、おなかいっぱい食べるために、じいさんねこに教えられたおおきなさかなを捕まえようと、遠くのみずうみまで出かけました。そこでおおきなさかなをみつけたまではよかったのですが、なかなか捕まえることができません。ある晩眠っているさかなをみつけた１１ぴきのねこは、ついにさかなをつかまえたのですが、家に着くまで絶対に食べないという約束は、夜の間にすっかり破られたのでした。

ストーリーに負けないユーモラスな絵が楽しさを膨らませます。最後、夜から朝への展開は絵本のページめくりの楽しさを最大限に利用しているといえるでしょう。

10人のゆかいなひっこし

安野　光雅　作
童話屋　1981年
48ページ　26×22㎝

１０人の子どもたちが左の家から右の家へ１人ずつ引越しをする文字のない絵本です。ただ、子どもたちは片方のページにしか描かれていません。左の家に８人の子どもがいる時、右の家には何人いますか？もう、おわかりですよね。この本はこのように数学的に面白いだけでなく、よく見ると家具や小物も少しずつ引越しをしています。何が引越しをしたか探すのも楽しいでしょう。また、１人１人の子どもには個性がありますから、どんな子どもなのか名前をつけたり想像したりしても素敵ですね。引越しが終わったら、今度は最後のページからめくってみてください。また、楽しい引越しのはじまりです。

※文字のない絵本です。

14ひきのおつきみ

いわむら　かずお　さく
童心社　1988年
32ページ　27×19cm

１４ひきのねずみ達が高い木の上でお月見台を作っています。森の仲間たちもやってきて、真っ赤な夕日がしずんだらお月見の始まりです。絵の中に細かく描かれた虫やかえるを探したり、ねずみ達それぞれについている名前をおぼえてひとりひとりの性格を思い浮かべながら見るのも楽しいでしょう。昼から少しづつ夜になっていく様子が、空を描かずに森全体の色で表現されています。やっと夜になって空にのぼったお月様の絵はそれまでに空が描かれていなかったぶん印象的です。

「１４ひきシリーズ」の一冊。シリーズを通してねずみ達と彼らの暮らす森の様子が季節感いっぱいの美しい絵で描かれています。

しょうぼうじどうしゃじぷた

渡辺　茂男　さく　山本　忠敬　え
福音館書店　1963年
28ページ　20×27㎝

じぷたは、古いジープを改良したちびっこ消防車です。働き者で、小さな火事だとすぐに飛び出し消し止めます。けれども大きな火事は任せてもらえず、いつも他の車に出動命令が出るのでした。他の３台は、それぞれじぷたに無い才能を持っていて、子ども達にも人気です。じぷたは時に３台をうらやましく思い、悲しくなる事もありました。そんなある日、山小屋が火事になり、狭い道も進めるじぷただけに出動命令が出ます。小さなじぷたは大活躍し、無事に火を消し止め、山火事を防ぐ事が出来ました。小さなじぷたがその体を生かして活躍する姿は、誰しも持ち味があり、それを生かす場があるのだと感じさせてくれます。写実的な車の絵も素敵です。

しろいゆきあかるいゆき

アルビン・トレッセルト　さく
ロジャー・デュボアザン　え
えくに　かおり　やく　ブックローン出版
1995年　32ページ　27×23㎝

雪の降る予感から、雪の季節、雪解けそして春の訪れまでを描いた絵本。雪の予感に皆が空を見上げ、雪に備えてゴム靴を履いたり、雪かきのシャベルを用意したりします。そして雪は降り、降り積もり、家々や道をすっかりうずめます。雪に足を滑らせる人、雪かきをする人。子どもたちは雪だるまを作ったり雪合戦をして遊びます。やがて風が吹き、日毎に日差しが強くなり、雪解けの季節へ。春の予感を感じる頃、こまどりが春を告げるのです。

冒頭の詩も含め、とてもやさしい文章が、雪のやわらかさや冬の厳かな雰囲気、春の暖かい風や光を効果的に表しています。雪の少ない地域に住む子や雪を知らない子にも、雪をやさしく伝える一冊です。

すてきな三にんぐみ

トミー・アンゲラー　さく
いまえ　よしとも　やく
偕成社　1969年
38ページ　30×22㎝

黒いマントに黒い帽子の怖い泥棒三人組。今夜もおどし道具を持って、山を下り獲物を探します。これまで手に入れた宝の数々は、すべて山の頂上の洞穴の中。そこが三人組の隠れ家です。

ある夜、いつものように馬車を襲った三人が手に入れたのは、金銀財宝ではなく、みなしごの少女ティファニーちゃん１人でした。連れ帰ったティファニーちゃんに、財宝の使い道を尋ねられた三人は使い道を考えていなかったことに気付きます。さて、三人は相談して何を始めるのでしょうか。

青い背景と三人の黒いコントラストがとても印象的です。お話とぴったりあった絵でぐんぐん引き込まれます。

スーホの白い馬　モンゴル民話

大塚　勇三　再話　赤羽　末吉　画
福音館書店　1967年
48ページ　24×32㎝

昔モンゴルの草原に、スーホという貧しい羊飼いの少年がいました。ある日、スーホは産まれたばかりの白い馬を拾います。心を込めて世話した馬は、やがて立派に成長し、スーホは人に勧められ、殿様の開く競馬大会に出場することにしました。スーホは見事優勝しますが、殿様に白馬を取り上げられ、いためつけられます。床に臥したスーホの傷が癒える頃、殿様の所から脱走した白馬が、追い矢に打たれながらも戻ってきました。息絶えた白馬はスーホの夢の中で、自分の亡骸で楽器を作るよう言い、そして出来たのが馬頭琴です。見開きの頁一杯に描かれた絵が、雄大なモンゴルの草原を表現すると共に、哀愁を漂わせます。

せいめいのれきし

バージニア・リー・バートン 文・絵
いしいももこ 訳　まなべまこと 監修
岩波書店　2015年
82ページ　25×26㎝

１９６４年から読み継がれている『せいめいのれきし』を、現在の科学的知見にあわせて改訂した科学絵本です。宇宙の星々が生まれてから、私たちが生活する現代まで、それぞれの時代について、その当時の地球がどんな環境だったのか、どんな生き物たちがいたのかが紹介されています。生命が生まれる前までをプロローグ、幕を“代”、場面を“紀”と地質時代に対応した舞台仕立てになっていて、学問上の時代の流れが感覚的に理解しやすくなっています。今日の私たちの生活が、これらの時代の積み重ねであることを、感じさせてくれる本です。

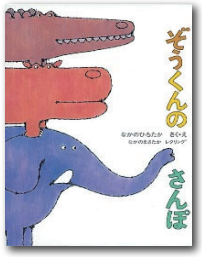
せんたくかあちゃん

さとう　わきこ　さく・え
福音館書店　1982年
32ページ　20×27cm

あるところに洗濯の大好きなかあちゃんがいました。かあちゃんはたくさんの洗濯物をあっという間に洗ってしまいます。洗濯するものがなくなってしまうと、子どもたちから犬や猫までまわりにあるものをかたっぱしから洗ってしまうのです。洗濯物を干しおわり、かあちゃんはごきげんです。そこへやってきたかみなりさまは、かあちゃんにつかまりきれいに洗濯されてしまいました。自分も洗濯してほしいとやってきた大勢のかみなりさまたちを前に、かあちゃんは「まかしときい」とうでまくりです。

頼もしいかあちゃんの洗濯ぶりに、見ている私たちも実に爽快な気分になります。

ぞうくんのさんぽ



なかの　ひろたか　さく・え
なかの　まさたか　レタリング
福音館書店　1977年
28ページ　27×20cm

ぞうくんがごきげんで散歩にでかけると、かばくんに会いました。

「いっしょにさんぽにいこう」とぞうくん。「せなかにのせてくれるならいってもいいよ」とかばくん。ぞうくんは「いいとも、いいとも」と背中に乗せてあげます。次にわにくん、その次にかめくんとみんな背中に乗せて、さあ一緒に散歩です。だけど、いくらぞうくんでもだんだん重くなってきて、とうとう池に落っこちてしまいます。みんなずぶぬれだけど、それでもなんだかうれしそうです。ちからもちのぞうくんの優しさと、ぞうくんたちの楽しい一日がリズムのよい文章と優しい色使いの絵で表現されています。

ぞうのババール

ジャン・ド・ブリュノフ　さく
やがわ　すみこ　やく　評論社
1974年　48ページ　28×20cm

ぞうのババールは、ある日悪者の狩人にお母さんを撃たれてしまい、逃げるうちにまちに辿り着きます。初めて見るまちにびっくりのババールは、優しいおばあさんと暮らし始めます。毎日楽しく暮らすババールでしたが、森のことを思い出すと寂しくて涙が出るのでした。しばらくたったある日、久しぶりにいとこのぞうたちに会ったババールは森に帰る決心をします。帰ってきたババールをみんなは大歓迎します。ババールは新しい王様になり、結婚して幸せに暮らしました。

ぞうのババールシリーズでは、楽しいこと悲しいこと、いろいろな事件に好奇心旺盛なババールが遭遇します。この本はそんなババールが人間と初めて出会うこどものころのおはなしです。

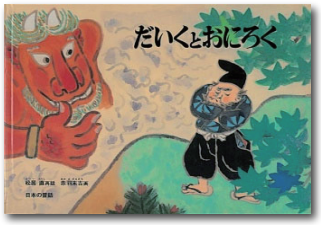
そらいろのたね

なかがわ　りえこ　文
おおむら　ゆりこ　絵
福音館書店　1967年
28ページ　20×27cm

ゆうじがひこうきを飛ばしていると、もりのきつねがやってきました。二人はひこうきときつねの持っていたそらいろのたねとを取り替えました。ゆうじがたねを庭にうめると、次の朝小さなそらいろの家がでてきました。ゆうじがおおきくなあれと水をかけると家は大きくなっていきます。どんどん大きくなった家は、やがてゆうじや動物たちも入れるくらいになりました。そこへやってきたきつねは、おおきくなったそらいろの家を見て、ゆうじにひこうきとまた取り替えてと言うのですが･･･。

そらいろのたねから家がでてきてどんどん大きくなる、そんな不思議なできごとにわくわくどきどきすること、うけあいです。

だいくとおにろく

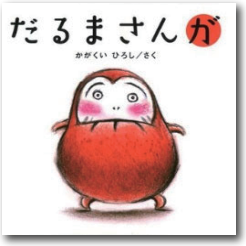


松居 直 再話　赤羽 末吉 画
福音館書店　1967年
28ページ　20×27㎝

流れの早い大きな川に、大工は橋を架けることになりました。そこへ鬼が現れ、大工の目玉と交換に橋をかけてやると提案し、本当に橋をかけてしまいます。鬼の名前を当てられなければ、大工は目玉を取られてしまいます。大工は鬼の名前を当てることができるのでしょうか？

見開きいっぱいに描かれた絵は迫力があり、昔話の世界へ引き込まれていきます。登場人物の表情は豊かで、大きくて真っ赤な鬼がにかにかと笑った顔は、どこかユーモラスな感じがします。大工がとぼけて鬼の名前を答える場面は、読み手も聞き手も気分が盛り上がります。ドキドキ・ハラハラのストーリーと迫力ある絵が生み出す世界を味わってほしい絵本です。

だるまさんが



かがくい　ひろし　さく
ブロンズ新社　2008年
20ページ　18×18㎝

「だ　る　ま　さ　ん　が」。言葉に合わせてゆらゆらと動くのは、ぷっくりと可愛いらしいだるまさん。ページをめくると、あらあらびっくり！「どてっ」とたおれたり、「ぷしゅーっ」としぼんだり、思いがけない展開が待っています。

繰り返しが楽しく、赤ちゃんへの読み聞かせにも最適。リズムをつけながら、体を揺らしながら読んであげてください。ご機嫌になること間違いなしでしょう。

子どもに寄り添う教員だった作者が、和んでほしい、喜んでほしい、という想いを込めたこの本は、子どもはもちろん大人まで笑顔にしてくれます。シリーズ２作目に『だるまさんの』、３作目に『だるまさんと』があります。

だるまちゃんとてんぐちゃん

加古　里子　さく･え
福音館書店　1967年
28ページ　20×27㎝

だるまちゃんは、仲よしのてんぐちゃんのうちわや帽子を見ると、次々に同じようなものが欲しくなりますが、お父さんが用意してくれるものでは納得がいかず、自分で工夫して作ります。てんぐちゃんは得意そうなだるまちゃんを見てにこにこ顔です。二人はますます仲よしです。

大好きな友だちを真似したがる小さな子どもを、たしなめるのではなく叶えようとする家族、そして友だちの余裕と愛情が伝わってきます。だるまちゃんが自分で創造する様子はほほえましく、お父さんが花と鼻を勘違いする場面では笑いがこぼれるでしょう。お父さんが床いっぱいに並べてくれた、たくさんのうちわや帽子のページは圧巻で、加古里子ならではの絵が楽しめます。

ちいさいおうち

バージニア・リー・バートン　文・絵
いしい　ももこ　やく
岩波書店　1965年
40ページ　24×25㎝

頑丈に作られたちいさいおうちは、長い間変わらない姿で、静かな田舎の丘の上に建っていました。ところが、遠くに町のあかりが見え出すと、自動車がやって来て、工事が始まり、急速に自然は失われていきました。大都会に取り残されたおうちは、田舎を恋しく思うのでした。

優しいタッチで綿密に描かれた絵に力があり、季節の変化、年月の経過が読み取れます。色彩豊かな自然の風景から、無機質な都会に変わっていく様子には胸が痛みます。ページの中央に描かれたおうちは人間の顔のように見え、穏やかな暮らしを取り戻した結末では喜んでいるようです。流れるように配置された文章で、自然と調和した暮らしへの賛歌を歌い上げています。

ちいさなうさこちゃん

ディック・ブルーナ　さく・え
いしい　ももこ　やく
福音館書店　1964年
28ページ　17×17㎝

うさぎのふわふわさんとふわおくさんの家の庭に天使が舞い降り、もうじきに赤ちゃんが生まれることを予言します。赤ちゃんはうさこちゃんと名づけられ、動物たちが次々にお祝いにやってきました。世界４０数カ国で翻訳・出版されているうさこちゃんシリーズの第１作目です。うさこちゃんはミッフィーとも呼ばれます。絵は、シンプルな線と青・緑・赤・黄のブルーナカラーで描かれ、登場人物の顔はみんな正面を向いているのが特徴です。１７㎝角で丈夫な装丁は、子どもが手に取って楽しむのに最適です。うさこちゃんの日常生活が優しい響きの文章でつづられ、読む人に幸せと安心感を与えます。

チムとゆうかんなせんちょうさん

エドワード・アーディゾーニ　さく
せた　ていじ　やく　福音館書店
1963年　48ページ　27×20㎝

チムぼうやは船乗りになりたいのに、お父さんとお母さんが取り合ってくれないので、とうとう汽船に密航をはかりました。見つかって船長に怒られましたが、船のしごとをやり遂げて、船員たちに気に入られました。船の暮らしに慣れた頃、嵐が船を襲いました。沈みかかる船に残った船長とチムがしっかり手を握って、最期の覚悟を決めたとき…。

「なくんじゃない。いさましくしろよ。わしたちは、うみのもくずときえるんじゃ」。年齢差を超え、勇敢な船乗り同士としてチムと船長の心がつながる場面は胸が高鳴ります。チムシリーズ全１１巻は３５年にわたって書かれ、どの話にも責任や友情、冒険のロマンがぎっしり詰まっていて、読む人を夢中にさせます。

２００１年に新版が出版されています。

つきのぼうや

イブ・スパング・オルセン　さく・え
やまのうち　きよこ　やく
福音館書店　1975年
24ページ　34×13㎝

お月さまが空から下を見ると、池の中にもうひとつのお月さまがいました。そこでお月さまは、月のぼうやを呼んで池のお月さまを連れてきてくれるように頼みました。月のぼうやはわたぐもを抜け、鳥の群れを抜け、丘の上、まちの通りに降りていきました。まるいものはたくさんあるけれど、どれもお月さまではありません。ようやく池にたどりついてかわいらしいお月さまを見つけました。

月のぼうやがどんどん下へ降りて行ったり、上へ昇って行く動きが縦長の絵本の形に生かされています。ユーモラスでかわいらしい絵も楽しい絵本です。

つるにょうぼう

矢川 澄子 再話 赤羽 末吉 画
福音館書店 1979年
32ページ 26×25cm

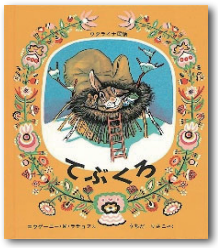
冬の初めのある日、よ平は翼に矢を受けて傷ついた一羽の鶴を助けてあげました。その夜、よ平の家に一人の美しい娘が訪ねてきました。
「はたを織る姿をのぞかないで下さい」と言われていたのに、よ平はついのぞいてしまいます。娘の本当の姿がわかったとき、それは娘との別れを意味していました。これは、おなじみの昔話「つるの恩返し」を絵本にしたものです。どこか鶴を思わせるような娘の姿、機を織るごとにやつれていく娘、障子の影など、細かな変化が美しい絵と文章で描かれています。最後の４ページに別れの悲しみが表現されており物語の余韻が残ります。

ティッチ

パット・ハッチンス さく・え
いしい ももこ やく
福音館書店 1975年
32ページ 26×21㎝

ティッチは３人兄弟の末っ子。お兄さんとお姉さんは大きな自転車を持っているのに、ティッチが持っているのは、小さな三輪車。お兄さんとお姉さんは凧を持っているのに、ティッチが持っているのは、風車。なにをやってもお兄さんとお姉さんにはかなわないティッチ。しかし、ティッチが持っていた小さな種をまくと･･･。最後は、お兄さんとお姉さんをびっくりさせることができてティッチは自慢げな表情です。
お兄さんやお姉さんに憧れる末っ子の心情が身近なできごとを通して見事に描かれています。シンプルな文と色鮮やかな絵は何度読んでも楽しめます。

てぶくろ　ウクライナ民話



エウゲーニー・M・ラチョフ え
うちだ りさこ やく
福音館書店 1965年
16ページ 28×23㎝

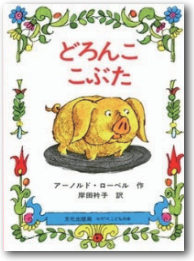
雪の森のなか、ねずみはおじいさんが落とした“てぶくろ”を見つけました。「ここでくらすことにするわ」と、ねずみは“てぶくろ”にもぐりこみます。そこへかえるがやってきました。動物たちは次々に増え、うさぎ・きつね・おおかみ・いのしし、最後にはなんとくままでが、“てぶくろ”のなかになかよく住み着いていきます。
擬人化された動物たちの会話のおもしろさもさることながら、“てぶくろ”のなかに、なにがなんでもはいっていこうとする彼らの姿、そして、“てぶくろ”の運命にはらはらどきどき！思わずその世界にひきこまれてしまうことでしょう。想像力をかきたてる民族色豊かな絵も楽しんでください。

どれがぼくかわかる？

カーラ・カスキン ぶん・え
よだ しずか やく
偕成社 1970年
30ページ 23×26cm

「ね、おかあさん　ぼくがみんなのなかにいたら、どれがぼくかわかる？」「わかるわ。」ぼく（ウィリアム）がみんなのなかで遊んでいても、間違いなくすぐに見つけてくれるおかあさん。たとえ、ぼくがうまになろうと、スカンクになろうと、おかあさんは必ず見つけてくれます。
そんな愛情あふれるおかあさんの、やさしくあたたかなまなざしを、始終感じることができる絵本です。もちろん、ぼくはおかあさんが大好き！そして、この絵本を読んでいるあなたも、きっと、こころあたたまる素敵な時間を過ごすことができるでしょう。
親子でぜひ読んでほしい１冊です。

どろんここぶた



アーノルド・ローベル　さく
岸田　衿子　訳
文化出版局　1971年
64ページ　21×15cm

どろんこが大好きなこぶたは、おばさんにきれいにそうじされ、どろんこもなくなってしまったため家出します。ところが探し求めたどろんこが、実は、セメントだったがために、たいへんな事になってしまいます。

間違ってセメントにしずんでいく面白さ、なんとも言えないこぶたの顔。最初から最後までこぶたの豊かな表情をおっていくだけでも、充分楽しめます。いきいきと描かれたこぶたやおじさん、おばさんの姿から、ローベルのやさしさにつつまれた、おだやかで、ユーモラスな世界を味わうことができるでしょう。

どろんこハリー

ジーン・ジオン　ぶん
マーガレット・ブロイ・グレアム　え
わたなべ　しげお　やく　福音館書店
1964年　32ページ　31×22㎝

ハリーは黒いぶちのある白い犬です。ある日、お風呂が大嫌いなハリーは、お風呂に水を入れる音を聞いて、ブラシをくわえて外に逃げ出します。元気に外を走り回り、ハリーは白いぶちのある黒い犬になってしまいます。家に帰ると、自分がハリーであることを、芸を披露して家の人にアピールします。最後の場面で、隠したブラシをチラリと見せながら、ハリーが安心しきった顔で眠っている様子は、ハリーにとっての家の居心地のよさが伝わってきます。また、この絵本は、字の読める大人よりも、読めない子どもの方が、先にハリーの身に起きた事件を感じとることができます。それは、文章が始まるよりも前に、絵が先にお話を始めているからです。

ねずみくんのチョッキ

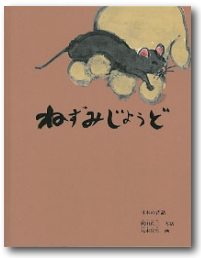
なかえ　よしを　作　上野　紀子　絵
ポプラ社　1974年
32ページ　25×21㎝

緑にふちどられた白い画面の下の方に墨色で描かれたねずみくん。一際目を引く赤いチョッキを着て、誇らしげに立っています。「いいチョッキだね　ちょっと　きせてよ」とみんなが次々にチョッキを着たがる気持ちもわかります。余計なものが何も描かれていない世界で、ねずみくんの小ささ、白い画面からはみ出すほどのぞうさんの大きさを味わってください。

ねずみくんはすっかりのびてしまった赤いチョッキにがっくり。

チョッキに腕をとおして帰っていくねずみくんの姿は悲しみにあふれています。しかし、このチョッキのあたらしい使い道があるのです。最後のページをめくってください。

ねずみじょうど



瀬田　貞二　再話　丸木　位里　画
福音館書店　1971年
28ページ　27×20㎝

そばもちを追いかけて行ったおじいさんが、ねずみに連れていかれた場所では、「ねずみのじょうど　ねこさえ　いなけりゃ　このよは　ごくらく　とんとん」とねずみが歌をうたいながらもちつき・こがねとぎをしていました。墨絵の色づかいも浄土の雰囲気を伝えています。響きのいい言葉でかかれているので、声に出して読んで、子どもと一緒に昔話の世界を楽しんでください。

表紙と裏表紙のねずみは仏様の手の上で居心地がよさそうです。読み終わったら、ねずみの顔を覗いてみてください。

ねむりひめ　グリム童話

グリム【原作】
フェリクス・ホフマン　え
せた　ていじ　やく　福音館書店
1963年　32ページ　31×22㎝

お祝いの宴会に呼ばれなかった１３人目の占い女に「１５になったら、つむにさされて、しぬぞ！」と呪いをかけられて１００年の間眠りつづけるお姫様、有名なグリムのお話です。お城中にひろがった眠りとお城をつつみかくしたいばらの様子が画家の手で再現されています。絵をみていると物語が語りかけてくるようです。日本語の文章も流れるようにスムーズです。１００年の眠りからさめたお城の様子を楽しんで下さい。

ホフマンの絵は自分の子どもたちへの贈りものとしてつくられました。その手描きの絵本が、やがて世界の子どもたちへも贈られたのです。

はじめてのおつかい

筒井　頼子　さく　林　明子　え
福音館書店　1976年
32ページ　20×27㎝

はじめてのおつかいをした時の気持ちを覚えていますか？おつかいという大役を果たそうとするみいちゃんのドキドキしている気持ちが、お金を握りしめて出かける姿や、自転車をさける姿や、転んでもけがより落としたお金を心配する姿から伝わってきます。裏表紙にはけがの手当てをしてもらって、買ってきた牛乳を赤ちゃんと飲むみいちゃんがいます。忘れずに見せてあげてください。そして、表紙に戻ると、おつかいを無事に終えて、出迎えのお母さんに笑顔でこたえるみいちゃんがいます。

横長の絵本のすみずみまで描かれた絵は日常の生活感があふれています。

はなのすきなうし

マンロー・リーフ　ぶん
ロバート・ローソン　え
光吉　夏弥　やく　岩波書店
1954年　1冊　21×17cm

“はなのすきなうし”ふぇるじなんどのはずなのに表紙を開くと勇ましい闘牛の絵です。ここに物語の伏線が張られています。いったいどんなお話なのだろう？と期待は膨らみます。表紙を開くとすぐに物語が始まるという絵本の好例です。静かで平和だった牧場の生活に、ある日勇ましい闘牛をもとめて街の男たちがやってきます。何の間違いか誰よりもおとなしいふぇるじなんどが選ばれてしまいます。さあどうなることでしょう？

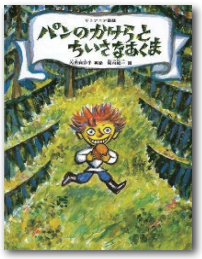
一人静かに花のにおいをかぐのが何よりすきなうし、ふぇるじなんどの生活は平和の象徴です。そして“人と違っていてもいいんだよ”そんなメッセージを届けてくれる絵本です。

はらぺこあおむし

エリック・カール　ぶん・え
もり　ひさし　やく
偕成社　1976年
25ページ　22×30㎝

あたたかい日曜日の朝、ちいさなたまごからあおむしが生まれました。あおむしは、月曜日にりんごをひとつ、火曜日になしをふたつ…とくだものやおかしを一週間食べ続けますが、食べても食べてもおなかはぺっこぺこです。あおむしが食べ過ぎておなかをこわす場面で、子ども達は、自分とあおむしを重ね合わせて読んでしまいます。まるく穴をあけてあおむしが食べた跡を表現したり、食べたものの数が増えるにしたがってページの大きさを変えたりと、あおむしが立派な羽を広げた蝶となるまでの生命の営みを、エリック・カールは豊かな色彩と工夫されたしかけにより、活き活きと表現しています。

パンのかけらとちいさなあくま リトアニア民話



内田 莉莎子 再話 堀内 誠一 画
福音館書店 1992年
32ページ 27×20㎝

びんぼうなきこりのべんとうはパンのかけらです。そのべんとうをぬすんだちいさなあくまは、おおきなあくまたちにかんかんに怒られてしまいます。おわびにきこりの役に立ってくるまで帰ってくるなと言われたちいさなあくまに、きこりは沼を麦畑に変えてくれるように頼みます。ちいさなあくまはみるまにりっぱな麦を実らせますが、地主に麦を全部持っていかれてしまいました。麦を取り戻すために、ちいさなあくまは知恵を働かせます。

いきいきと躍動感あふれる絵や、あくまがきこりの味方であるというギャップの面白さ、そしてちいさなあくまときこりが力を合わせて意地悪な地主と対決する痛快さに、ついつい惹き込まれてしまいます。

ピーターのとおいみち

リー・キングマン 文
バーバラ・クーニー 絵 三木 卓 訳
講談社 1983年
47ページ 21×26㎝

ピーターは深い森の中に住んでいる５才になったばかりの男の子です。ピーターの友だちはねこといぬとひつじとあひるだけです。５才になったら村の学校へ行き、一緒に遊ぶ友だちができるとお母さんは言います。ある朝、ピーターは１人で家を出て村へ向かいます。

“せなかがぞくぞくっとしました”という表現が何度も出てきます。ピーターの不安と緊張が読む側にストレートに伝わってきます。初めての冒険旅行なのですから無理もありません。気がつくとピーターと一緒に歩いているような気分にさせてくれる絵本です。やがて来るかもしれないその日のために男の子も女の子も読んでおきたい１冊です。

ピーターラビットのおはなし

ビアトリクス・ポター さく・え
いしい ももこ やく 福音館書店
1971年 56ページ 14×11㎝

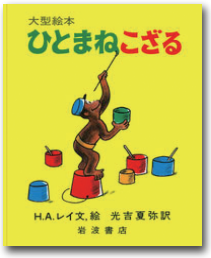
いたずらっこのピーターはお母さんの注意も聞かず、お百姓のマグレガーさんの畑に入り、野菜を食べてしまいます。運悪くマグレガーさんに見つかったピーターは命からがら逃げ出します。

いたずらをするピーターが生き生きと描かれ、子どもたちも一緒に冒険を楽しむことができます。うさぎたちが動物本来の動きを損なわずに擬人化されており、ていねいに描かれている絵本です。

シリーズを通して、イギリスの湖水地方が舞台となっており、ポターが愛した自然と動物たちが細やかに美しく描かれています。

２０１９年に新装版改版が出版されています。

ひとまねこざる



H・A・レイ 文・絵 光吉 夏弥 訳
岩波書店 1983年
47ページ 28×22㎝

とても知りたがりやのこざるじょーじは、動物園の外が知りたくて、動物園を抜けだします。じょーじは､思いついたことは何でもするので、街に出ても失敗ばかりです。けれども、なかよしの黄色いぼうしのおじさんがじょーじをみつけてくれて、映画に出ることになります。

知りたがりやでいたずら好きのじょーじが繰り広げる事件はとても楽しく、読んでいる子どもたちを夢中にさせます。また、じょーじがいたずらをしても、それを優しく包み込む、大人たちの愛情があふれています。

100まんびきのねこ

ワンダ・ガアグ　ぶん・え
いしい　ももこ　やく
福音館書店　1961年
31ページ　20×27㎝

むかしあるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。あるとき、おじいさんはおばあさんのほしがっていた猫を探しにでかけます。おじいさんはたくさんの猫がいる丘にたどりつき１匹の猫を選ぼうとしますが、どれもきれいな猫ばかりで選ぶことができません。そこでそこにいる猫をみんな連れて帰ることにしました。けれども家についた猫たちは、自分を選んでもらおうと大げんかを始めてしまいます。

たくさんの猫がいる様子が「ひゃっぴきのねこ、せんびきのねこ、ひゃくまんびき、１おく、１ちょうひきのねこ」とリズミカルに何度も繰り返されます。猫でいっぱいの丘や猫の大行列などが細かく描かれており、白と黒だけでシンプルに描かれた絵本ですが、物語の面白さを最大限に伝えてくれます。

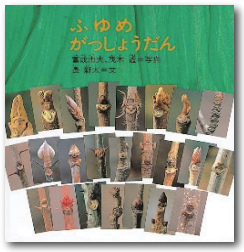
ふしぎなたけのこ

松野　正子　さく　瀬川　康男　え
福音館書店　1963年
28ページ　20×27cm

たけのこを堀りに行ったたろが、脱いだ上着をたけのこにかけると、そのとたん、たけのこがぐぐぐっと伸びました。たけのこは果てしなく伸びてゆきます。たろはたけのこにしがみついたまま降りられなくなりました。困った村人達がたけのこを切り倒すと、思いがけないことが起こります。

なにしろたけのこの伸び方が半端じゃありません。いくつもの山々の木を押し分けて、夜になり、朝になって、やっと地面に倒れるぐらい長いのですから。そんなたけのこが横長の画面いっぱいに描かれています。また、村人達の表情と、躍動感のある動きが、ぐんぐんと伸びてゆくたけのこのように生き生きと描かれ、最後はみんな大満足でお話が締めくくられます。

ふゆめがっしょうだん

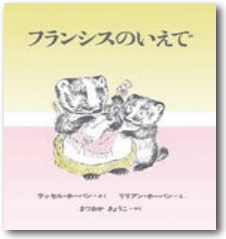


長 新太 文
冨成 忠夫 写真　　茂木 透 写真
福音館書店
1990年　28ページ　26×24㎝

「みんなは　みんなは　きのめだよ　はるになれば　はがでてはながさく　パッパッパッパッ」と、春を待ちわびるように歌ういろんな顔、顔、顔。実はみんな、木の冬芽なのです。笑った顔にすまし顔、ふわふわの帽子をかぶっていたり、動物に似ていたり。それぞれ個性的でユーモラスで、こんな顔が樹木についているのかと驚くことでしょう。

顔のように見えるのは、落葉した葉の柄がついていた跡、そして帽子のように見えるのは、これから葉や花になる冬芽の部分だそうです。むくのき・ねむのき・えのきなど、樹木はどれも公園や雑木林で見ることができるものばかり。あなたも探してみませんか？自然と仲良くなれる写真絵本です。

フランシスのいえで



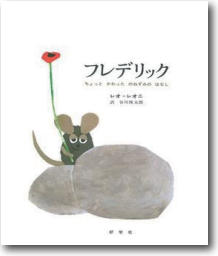
ラッセル・ホーバン　さく
リリアン・ホーバン　え
まつおか　きょうこ　やく
好学社　1972年　1冊　26×21cm

妹が生まれたフランシスはかまってもらえなくなったような気がして、食堂のテーブルの下に家出します。すると、お父さんとお母さんが、フランシスがいなくなってどんなにさみしくなったか話しはじめました。

下の子ができた子どもの気持ちは複雑です。そんな子どもの気持ちを理解して、しっかりと受け止めている親の姿が印象的です。また、自分の気持ちを歌ったフランシスの歌がかわいらしく、この絵本の魅力をますます引き立てています。

親と子の愛情のこもった表情が、やわらかな線でやさしく描かれています。甘くなり過ぎない淡い色彩がすてきです。

フレデリック

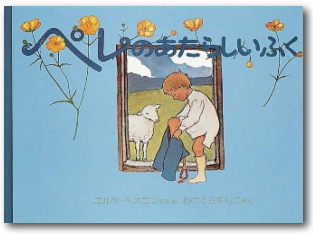


レオ･レオニ　作　谷川　俊太郎　訳
好学社　1969年
1冊　28×23㎝

冬をのりきるために、昼も夜もたべものを集める野ねずみたち。そんな仲間たちの横で、じっとしているフレデリックは、なにを言われても「ぼくは　おひさまの　ひかりを　あつめてるんだ」「いろをあつめているのさ」「ことばをあつめてるんだ」と動こうとしません。しかし、冬がきて仲間たちが元気をなくした時、みんなを勇気づけたのはフレデリックが貯えておいた言葉だったのです。野ねずみと一緒に、きんいろの光やいろいろな色を感じてください。

レオ・レオニは作り出す絵本ごとに、登場人物に最もふさわしい形式を使用します。この貼り絵で描かれた世界は詩的な雰囲気が漂っています。言葉が持つ力を改めて感じさせてくれる絵本です。

ペレのあたらしいふく



エルサ･ベスコフ　さく
おのでら　ゆりこ　やく
福音館書店　1976年
15ページ　24×32㎝

ペレの服が小さくなりました。ある日、ペレは自分のひつじの毛をかりとります。おばあちゃんに毛をすいてもらう代わりに畑の草取りをし、ペンキやさんのお使いをして糸の染め粉を買い、おかあさんに布を織ってもらう代わりに妹の面倒をみ、仕立て屋さんに服を作ってもらう代わりに家の手伝いをしました。そしてついにペレの服が出来上がります。

淡々とした展開の中に、ペレのひたむきさや、服が出来上がるまでの過程、労働の対価など、さまざまな要素が込められていて、社会の一部を覗くことができます。さまざまな年齢の子が読んでも、それぞれ何かを感じ取れる絵本といえます。

まあちゃんのながいかみ

たかどの　ほうこ　さく
福音館書店　1995年
28ページ　20×27㎝

みじかいおかっぱのまあちゃん。長い髪が自慢の友達とおやつを食べながら、自分も髪をのばすんだと宣言します。「そのながいことといったらね･･･」とはじまる、まあちゃんの長い髪の使い方、お手入れの仕方のなんとユニークなこと。ページを開くたびに、びっくりわくわくの連続です。子どものもつ自由な発想は頭の固くなりがちな大人たちにも新鮮な刺激をくれます。絵本の見開きを横に縦にと大胆に使っているのもこの作品の魅力の一つです。お子さんに読んであげる時は、次のページは横開きか縦開きか、事前にこっそり練習してみてください。まあちゃんの想像の世界にすっぽり入ったお子さんから歓声があがることうけあいです。

まりーちゃんとひつじ

フランソワーズ　文･絵
与田　準一　訳
岩波書店　1956年
1冊　21×17㎝

ぱたぽんは、ひつじのぱたぽんに言います。「ぱたぽん、おまえはいつかこどもを１ぴきうむでしょう。わたしたち、その毛をうって、すきなものがなんでもかえるわね」。ぱたぽんは「ええ、こどもが１ぴきできるでしょう。わたしたち、ふわふわの毛をたくさんつくってあげますよ」と答えます。では、こどもが２ひきだったら、３びきだったら？まりーちゃんは話す度に、買えるものを想像するのですが、さて、ぱたぽんは何と答えるのでしょう。繰り返される歌のような会話や数遊び、シンプルな描線とあたたかな色づかいが実に楽しく、まるで牧場で一緒に遊んでいるような気持ちになる絵本です。

めっきらもっきらどおんどん

長谷川 摂子 作　ふりや なな 画
福音館書店　1990年
32ページ　20×27㎝

ある夏の日、かんたは遊び相手を探して神社に行きました。「めっきらもっきらどおんどん」と、めちゃくちゃな歌を大声で歌うと、木の根っこにある穴から奇妙な声が聞こえてきて、覗き込んだかんたは中へ吸い込まれてしまいます。そこで出会ったへんてこりんな３人組とかんたとの奇想天外な物語です。

愉快で個性豊かな登場人物たちが色鮮やかに描かれており、躍動感あふれる絵とリズミカルな文章が読者を楽しませてくれます。とくに縦向きに描かれている場面は迫力満点で、かんたと一緒に冒険している気分になれることでしょう。３人組にまた会いたくなるような、何度でも繰り返し読みたい絵本です。

もりのなか

マリー・ホール・エッツ　ぶん・え
まさき　るりこ　やく
福音館書店　1963年
40ページ　19×26㎝

ぼくは紙のぼうしをかぶり、新しいラッパを持って、森へ散歩に出かけました。途中で出会ったらいおん、ぞう、くま･･･動物たちが、みんなぼくの散歩についてきます。おやつを食べて、たっぷり遊び、ぼくはかくれんぼうのおにになります。「もういいかい！」と目を開けると、そこにいたのは？小さな子どもの抱くあたたかな世界観と空想の広がりを、ていねいに繰り広げている絵本です。最後にお父さんがむかえにきてくれて、主人公のぼくは、安心して「またね」と森をあとにします。読んでいる小さな子どもたちも深く満足することでしょう。モノクロの絵ですが、ぬくもりに満ちて見飽きることがなく、心に残ります。続編に『またもりへ』があります。

やまなしもぎ

平野　直　再話　太田　大八　画
福音館書店　1977年
40ページ　21×23㎝

三人の兄弟が、病気の母の願いで、奥山にやまなしをもぎに行きます。１番上のたろうが出かけたとき、途中で出会ったばあさまに忠告を受けるのですが、たろうは忘れて違う道をどんどん行ってしまい、たろうは戻ってきませんでした。２番目に出かけたじろうも、ばあさまに言われたことを忘れ、戻ってきませんでした。そこで３番目のさぶろうが出かけていきます。さぶろうはばあさまの言うとおりに進んで、大きな沼のそば、ざらんざらんとなっているやまなしのもとへたどりつきますが･･･。山の秘密を知らずに出かけた兄弟の道行きを、ページを繰るにつれ色彩の増す絵が力強く盛り上げていきます。岩手県の民話です。

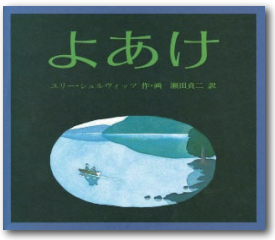
ゆきのひ

エズラ・ジャック・キーツ　ぶん・え
きじま　はじめ　やく
偕成社　1969年
32ページ　23×26㎝

冬のある朝、小さなピーターは、夜の間に雪がふりつもったことを知り、赤いマントを着て外に飛び出します。歩いていくと、きゅっ、きゅっと音がなり、雪の上に足跡が残ります。ピーターはひとりで雪遊びを楽しみます。雪に天使のあとをつけたり、雪だるまをつくったり山登りごっこをするのです。最後に、明日遊ぼうと思って雪だんごをうちへ持ってかえることにします。でも、雪は溶けてしまいました。

コラージュによる絵で、淡い色彩に赤いマントを見ていると、雪の日のはずむような楽しさを誰もが味わえることでしょう。翌日には友達とまた雪遊びに出かけるという終わりかたにも尽きぬ楽しさがあります。

よあけ



ユリー・シュルヴィッツ　作・画
瀬田　貞二　訳
福音館書店　1977年
32ページ　24×26㎝

夜ふけの湖のほとり。そこは、音もなく静まりかえって、寒くしめっている。木の下に、おじいさんと孫が寝ている。月だけが照り、動くものの ない世界に、ふと、そよかぜが吹き、さざなみが立つ。もやが立ちこめてくる。こうもり、かえる、そして鳥のこえ。周囲はめざめをむかえる。おじいさんが孫を起こす。２人は食事をし、湖へボートをこぎ出す。そのとき、太陽がのぼり、あたりは日の光をうけ、いっぺんにみどりにかがやく。

夜陰の重い彩りからはじまるのですが、明けそめていくうつろいがみごとに描かれ、最後に鮮やかな色彩の日の出を迎えます。自然の雄大さ、美しさが深く心にのこる絵本です。

よかったねネッドくん

レミー・シャーリップ　作
やぎたよしこ　訳　偕成社
1969年　42ページ　26×19㎝

ニューヨークに住んでいるネッドくんは、パーティに招待されました。でもパーティ会場は、とても遠いフロリダ。運よくともだちが飛行機を貸してくれますが、途中で飛行機が爆発してしまいます…。

幸運と不運とが、ページをめくるごとに訪れ、それに合わせてカラーと白黒のページが交互に現れます。ネッドくんにつぎつぎと降りかかる危機と、それをかわす奇想天外の解決法。テンポよく進む物語に思わず引き込まれますが、ただ楽しいだけではなく、「楽しい時はいつまでもは続かない。でも、困った時も、そのあとにはきっといいことが待っている。」と気づかされます。本文は日本語と英語が併記されています。

ラチとらいおん

マレーク・ベロニカ　ぶん・え
とくなが　やすもと　やく
福音館書店　1965年
44ページ　16×23㎝

ラチは世界中で１番弱虫な男の子。犬も暗闇も、友達さえ怖くて、１人ぼっちですごしています。ある朝、ラチの前に小さな赤いらいおんが現れました。「つよくなりたいなら、ぼくがつよくしてやるよ」。２人は毎朝体操をしました。らいおんが側にいるとラチも勇気が出て、怖かった犬や暗闇を次々と克服していきます。すっかりたくましくなったラチは、困っている友達を助けることもできました。そしてその時、らいおんはラチのもとをそっと去っていきました。健康な体をつくり、勇気を持って行動できるよう見守り、促す。そしてそっと離れる。子育てと子離れに悩む大人たちにとっても、らいおんは心強いお手本かもしれません。

ロバのシルベスターとまほうの小石

ウィリアム・スタイグ　作
せた　ていじ　やく
評論社　1975年
32ページ　30×23㎝

ロバのシルベスターは、ある日、燃えるように赤い小石をみつけました。これはなんでも願いをかなえてくれる魔法の小石だと気づいたシルベスターは、喜んで家へ帰ります。ところが途中でライオンに出くわし、恐ろしさのあまり「岩になりたい」と願ってしまったために、シルベスターはもとの姿に戻れなくなりました。家ではとうさん、かあさんがとても心配して探し回り、つらい日々を送って１年が経っていきます。

もと風刺漫画家のスタイグの絵はユーモアに溢れ、表情がとても絶妙です。魔法の小石をめぐるファンタジーであると同時に、家族の愛情に満ちた１冊です。

２００６年に新版が出版されています。

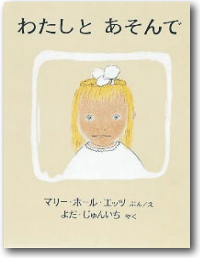
わゴムはどのくらいのびるかしら？

マイク・サーラー 文
ジェリー・ジョイナー 絵
岸田衿子 訳　ほるぷ出版
1976年　32ページ　18×23㎝

ぼうやがベッドのわくに引っかけた輪ゴムを、自転車にのって、バスにのって、きしゃにのって、どこまでも遠くへのばしていきます。ゴムがどこまでも伸びていく面白さ、つぎつぎと乗り物を変えていく面白さ、そして、その繰り返しが子どもたちをひきつけます。

身近で当たり前すぎて忘れてしまう、ゴムが伸び縮みする不思議に初めて出会った時の感動を思い出させてくれます。そして、その性質への好奇心から、奇想天外な空想まで膨らんでしまう、子どもたちの無垢で自由な発想のすごさを感じさせてくれます。

わたしとあそんで



マリー・ホール・エッツ　ぶん・え
よだ　じゅんいち　やく
福音館書店　1968年
29ページ　27×20㎝

はらっぱへあそびにいった女の子は、ばったを見つけて「ばったさん、あそびましょ」とつかまえようとしますが、ばったは逃げてしまいます。

かえるさんも、かめさんも、りすさんも、かけすさんも、うさぎさんも、へびさんも、みんな女の子が近よると逃げていってしまいました。そこで、女の子が音を立てずに腰かけていると･･･。

息をひそめた表情、動物に囲まれた表情がすばらしく、女の子の喜びをゆっくりと伝えます。すべてのページに描かれているおひさまの、女の子を見守るあたたかいまなざしは、私たち大人のまなざしでもあるのでしょう。

やわらかな黄色が心に残ります。

わたしのワンピース

にしまき　かやこ　え・ぶん
こぐま社　1969年
1冊　20×22㎝

空から落ちてきたまっしろなきれでワンピースを作ったうさぎさん。ワンピースを着てお花畑を散歩すると、ワンピースが花模様になっちゃった。すると雨が降ってきて、今度はなんと水玉模様になっちゃった。

つぎつぎと変化する模様と言葉の繰り返しに「次はなにかな？」と想像して楽しむ事ができる本です。虹や夕焼け雲を身にまとうって、どんなに気持ちのよいものかしら、と子どもの五感をくすぐります。

子どもが大人の服や靴を身につけたり、新しい服を着て意気揚々と行進する姿を見かけます。この本が子どもの心をとらえて離さないのは、きっと、そんな満足感を思い出させてくれるからなのでしょう。

わにさんどきっはいしゃさんどきっ

五味　太郎　作・絵
偕成社　1984年
32ページ　23×23㎝

わにさんが虫歯の治療に行くと、こわそうな道具を持ったはいしゃさんが現れました。はいしゃさんが虫歯の治療に出向くと、こわそうなきばを持ったわにさんがたっています。ふたりともどきどき、こわごわ。歯医者さんと患者のわにさん、立場の違うふたりが、おなじ言葉を使いながらお話しはすすみ、その違いを絵で表現しています。また、おなじ言葉の繰り返しが、心地よいリズムを作り出しています。声に出して楽しく読みたい１冊です。

作者名索引

あ
アーディゾーニ，エドワード ・・・・・・１８
赤羽　末吉 ・・・・・１２，１５，１７，１９
アンゲラー，トミー・・・・・・・・・・・・１５
安野　光雅・・・・・・・・・・・・・・６，１４

い
イ　ヨンギョン・・・・・・・・・・・・３
石井　桃子・・・・・・・・・・・・・・・・４
イソップ・・・・・・・・・・・・・・・・・５
稲田　和子・・・・・・・・・・・・・・１２
いわむら　かずお・・・・・・・・１４

う
ウィーズナー，デヴィット・・・・・・１０
ウィリアムズ，ベラ・Ｂ・・・・・・９
上野　紀子・・・・・・・・・・・・・・２０
内田　莉莎子・・・・・・・・・・・・・２２

え
エインズワース，ルース・・・・・・・・１３
エッツ，マリー・ホール・・・・２５，２７

お
太田　大八・・・・・・・・・・・・・・・２５
大塚　勇三・・・・・・・・・・・・・・・１５
おおむら　ゆりこ・・・・・１２，１７
オクセンバリー，ヘレン・・・・・１１
オルセン，イブ・スパング・・・・・１８

か
カー，ジュディス・・・・・・・・・・・・７
ガアグ，ワンダ・・・・・・・・・・・・２３
カール，エリック・・・・・・・・・・２１
かがくい　ひろし・・・・・・・・１７
加古　里子・・・・・・・・・・１０，１７
カスキン，カーラ・・・・・・・・・・１９
カリジェ，アロイス・・・・・・・・・・５
ガルドン，ポール・・・・・・・・・・３

き
キーツ，エズラ・ジャック・・・・・２５
木下　順二・・・・・・・・・・・・・・・１０
キングマン，リー・・・・・・・・・・２２

く
クーニー，バーバラ・・・・・・・・２２
グリム・・・・・・・・・・・・３，６，２１
グレアム，マーガレット・ブロイ・・・・２０

こ
五味　太郎・・・・・・・・・・・・・・・・２７

さ
佐藤　忠良・・・・・・・・・・・・・・・・・６
さとう　わきこ・・・・・・・・・・・・・１６
佐野　洋子・・・・・・・・・・・・・・・・・７
サーラー，マイク・・・・・・・・・・・・２７

し
シーモント，マーク・・・・・・・・・・１１
ジオン，ジーン・・・・・・・・・・・・・２０
清水　崑・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
シャーリップ，レミー・・・・・・・・２６
シャロー，ジャン・・・・・・・・・・・・８
シュルヴィッツ，ユリー・・・・・・２６
ジョイナー，ジェリー・・・・・・・２７

す
スタイグ，ウィリアム・・・・・・２６
スピアー，ピーター・・・・・・・・・・４
スロボトキーナ，エズフィール・・・・７

せ
瀬川　康男・・・・・・・・・・・・・・・２３
瀬田　貞二・・・・・・・・・・・・・・・２０
センダック，モーリス・・・・・・・９

そ
ゾロトフ，シャーロット・・・・・・５

た
たかどの　ほうこ・・・・・・・・・・２４
田島　征彦・・・・・・・・・・・・・・・１３

ち
長　新太・・・・・・・・・・・・・・・・・２３

つ
ツヴェルガー，リスベート・・・・・・・５
筒井　頼子・・・・・・・・・・・・・・・２１

て
デュボアザン，ロジャー・・・・・９，１５
テルリコフスカ，マリア・・・・・・・１４

作者名索引

と
ドーハーティ，ジェームズ・・・・・・4
冨成　忠夫・・・・・・・・・・・・・・23
トルストイ，A・・・・・・・・・・・・・・6
トレッセルト，アルビン・・・・・・・15

な
なかえ　よしを・・・・・・・・・・・20
中川　宗弥・・・・・・・・・・・・・・・4
なかがわ　りえこ・・・・・・・12，17
なかの　ひろたか・・・・・・・・・16
なかの　まさたか・・・・・・・・・16

に
ニコルソン，ウィリアム・・・・9
にしまき　かやこ・・・・・・・・・27

は
長谷川　摂子・・・・・・・・・・・・25
バートン，バージニア・リー・・5，16，18
ハッチンス，パット・・・・・・8，19
馬場　のぼる・・・・・・・・・・・・・14
バーニンガム，ジョン・・・・・・11
林　明子・・・・・・・・・・・・・・8，21

ひ
平野　直・・・・・・・・・・・・・・・25

ふ
ブテンコ，ボフダン・・・・・・・14
ブラウン，マーガレット・ワイズ・・・8
ブラウン，マーシャ・・・・・・・13
フラック，マージョリー・・・・4，6
フランソワーズ・・・・・・・・・・・24
フリーマン，ドン・・・・・・・・・11
ふりや　なな・・・・・・・・・・・25
ブリュノフ，ジャン・ド・・・・16
ブルーナ，ディック・・・・・・・18

へ
ベーメルマンス，ルドウィッヒ・・・・12
ベスコフ，エルサ・・・・・・・・・24
ベロニカ，マレーク・・・・・・・・・26
ヘンツ，ゼリーナ・・・・・・・・・・5

ほ
ホーバン，ラッセル・・・・・・・23
ホーバン，リリアン・・・・・・・23
ポター，ビアトリクス・・・・・・・22
ホフマン・フェリクス・・・・・6，21
堀内　誠一・・・・・・・・・13，22

ま
松居　直・・・・・・・・・・・・・・・・17
松岡　享子・・・・・・・・・・・・・・・8
マックロスキー，ロバート・・・・10
松野　正子・・・・・・・・・・・・・・23
マリ，イエラ・・・・・・・・・・・・・・3
マリノ，ドロシー・・・・・・・・・・12
丸木　位里・・・・・・・・・・・・・・20
マルシャーク，サムイル・・・・13

も
茂木　透・・・・・・・・・・・・・・・23

や
ヤーノシュ・・・・・・・・・・・・・・・8
矢川　澄子・・・・・・・・・・・・・・19
山本　忠敬・・・・・・・・・・・・・・15

ゆ
ユードリィ，ジャニス・メイ・・・・11

ら
ラチョフ，エウゲーニ・M・・・・19

り
リーフ．マンロー・・・・・・・・・・21

れ
レイ，H・A・・・・・・・・・・・・・22
レーベデフ，ウラジミル・・・・・・13
レオニ，レオ・・・・・・・・・・・3，24

ろ
ローゼン，マイケル・・・・・・・・11
ローソン，ロバート・・・・・・・・21
ローベル，アーノルド・・・・5，20

わ
わきた　かず・・・・・・・・・・・・・・7
渡辺　茂男・・・・・・・・・・・・・・15

司書が選ぶ１００冊の絵本
<福岡市総合図書館(本館・分館)>

２０２２年３月発行

編著：福岡市総合図書館(本館・分館)司書
発行：福岡市総合図書館
〒８１４－０００１
福岡市早良区百道浜３－７－１
電話　０９２－８５２－０６００（代表）
ＵＲＬ　https://toshokan.city.fukuoka.lg.jp/